

翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』（八）

肥留川 嘉子
大山 和子
隅田 三鈴
高森 松子

凡例

- 一、「翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』（七）」（『光華日本文学』第十七号、平成二十一年十月）の後を承けて、京都光華女子大学図書館蔵『雪梅芳譚犬の草紙』の「四編下」を、図版を掲げつつ翻刻する。合巻『雪梅芳譚犬の草紙』については、「初編上」の翻刻を掲載した『光華日本文学』第十二号の「凡例」を参照いただきたい。
- 一、翻刻の方針のみあらためて掲出する。

- 1、図版は各丁見開きを一面とし、丁付けにより「一ウ、二オ」のように示す。
 - 2、本文翻刻は、やはり「(一ウー二オ)」のように冠し、改行位置は / で示し、丁移りは「」で示すが、書入れについては丁付けにこだわらない。
 - 3、一面が二枚の絵組から成る場合、翻刻の方のみ半丁ごとに分離する。
 - 4、原文はできる限りそのままとするが、漢字仮名とも、異体字、略体字は現行のものに改めた。
 - 5、読みやすくするため、句読点を補い(ただし、序文の句点は原文のままとし、その旨を断わった)、会話文については「」を、また会話文中の会話文には「」を補った。原文にある「」は『に改めた(原文の「あるいは』は、『とした)。さらに仮名を適宜、漢字に置き換え、その場合もとの仮名をルビに移した。
 - 6、原文の振り仮名は、右と区別するために() に入れた。ただし、袋・表紙および序文等、一部原文のままの振り仮名に() をつけなかったところがある。その場合は、その旨を断わった。
 - 7、書入れは本文のあとへ一段下げて、文意の通り易い順に記した。
 - 8、本文中にある読み進めるための合印については、すべて●で統一した。
 - 9、「初編下」に至って出てきた、本文中の○(段落を改める意識で使用されている模様)は、その位置にそのまま翻刻した。
- 一、末尾に、「翻刻『雪梅芳譚犬の草紙』(七)」までに倣って、「四編下」に出るもののみながら、登場人物名(まれに地名もある)と、元の読本『南総里見八犬伝』の相当する名称との、対照表を付した。



図版1 四編上原裏表紙(色刷)、四編下原表紙(色刷)

(読み仮名は原文のまま)

〔原表紙〕
犬の草紙

いぬのくさし
いちみやうはつげんでん
一名 八犬傳

笠亭仙果鈔録

四編下

〔原表紙見返し〕

(読み仮名は原文のまま)

江／戸／に／し／き／縮／寫

うつの山／すへつて

俵たはらころひ／しつ

しかしげが／なく

こしの／下ケもの

犬の草紙／四編下

仙果寫

仙果録／豊國画／葛吉版



図版2 原表紙見返し(色刷)、十一才

〔十一才〕

三

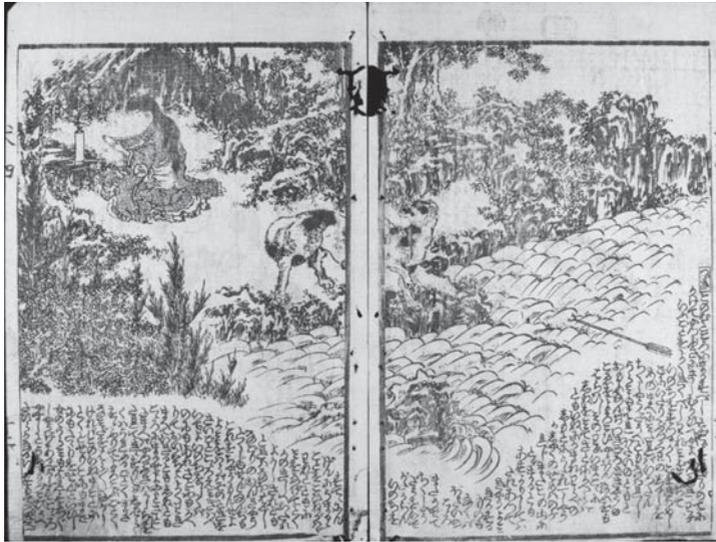
二の巻より御目にかゝる顔あらん。及かじ、流れに身を沈め、骸も留めずなりなん」と既に川辺に臨み給ひ、遙々其方を眺め遣り、「密かに使ひを幾度も遣せ給ひし母上の、今如何にしておはすらん。身を徒らに為す由を、せめて一筆書き置かば、また人の見ることのあらん。なくて朽ちなば朽ちもせよ、我が命毛も今暫し、野辺の草花引き振ちて、折り持つ菊は散らねども、ほろほろ落つる露涙、袂の時雨袖の雨、濡れ々窟へ帰り給へば、八房は山の芋柿栗などを銜へ持て来て、姫を待ち侘び居たりしが、見るより早く駆け出で、袖に纏はり後に付き、また先に立ち尾、振りてさながら迎へ入る如くし、只管食事を勧めれども、姫はなか／＼見るも転てく、絶えて言葉もかけ給はず。残り少なき料紙を取り出し、皺引き延ばし筆執りて、ありしことごとくも一つも洩らさず、文書き終はり読み返

し、巻きて／片方に差し置き給ひ、猶／様／の繰り言も言ふほど／愚痴と思ひ切り、彼の花を／仏に参らせ、西に向かひて／しば／拜し、襟に掛けたる数珠、執りて押し揉み給ふに、常に變はり／怪しや音のせざりければ、執り直しよく見給へば、彼の数取りの八つの珠、如是畜生にせやしか／の文字は／またしも跡無く消え、再び元の仁義礼智いんぎ忠信孝悌かうていん／の文字となり、いと鮮やかに読まれたり。斯、る不思議を見給ふにも／弁へ難きことなれども、「我が浅／しき心には、犬の気を受け／懐妊し、恥ぢて非業の死を為すは畜生道の苦患なり。●／されども仏の／大慈悲にて八／房さへも菩提に／入れば、来ん世は／仁義八行の／人に生まれん。その／由を／此処にし／めし給ふ／ならん。／さあらば／犬をも／手に／かけて／殺さば、／彼も／畜生の／苦を免／れん／縁と／ならんか。／さばれ／殺すも／また痛まし。／この由／詳しく／彼に／示し、／

〔十一ウー十二オ〕

つゞき 好むところに任すべし」と数珠を左の手に／掛けて、八房に差し向かひ、『やよ八房、我が言ふことをよく聞くべし。我身を恥ぢて／命を捨てる覚悟を極めし。／業至り、仏果の験を／目の前に見たれば、一旦／畜生道へ伴はれし／恨みも晴れ、菩提の友と／思ふ汝、月頃読経の／声を喜び、や、煩惱をも／払ひし身の、我が今此処に／死ぬを見て里に帰らば／友犬に咬まれ、童の／楯に打たれ、一生／呵責の責めは逃／れじ。またこの山に／留まるとも、／明日よりしては／誰あつて／経読み／聞かする／者も／無くば、／菩提の／心／また失せて／畜生／道を出で／難からん。／命を／捨て、人／間に生まる、／ことを／冀はゞ、／我とともに／身を投げて疾く／彼の岸へ至れ／よかし。されども／時は猶早し。／名残の御経／読誦せん、汝も／これを聴聞せよ。／読み終はらばその時を／最期と心得、汀へ／出でよ。命惜しくは／野にもあれ、里にも帰／りて老い朽ちよ。よくわき／まへて、生きるとも死ぬるとも／心に任せよや』と諭し／給へば、八房は頭を／垂

つぎへ



図版3 十一ウ、十二オ

れて聞^き、居^をりしが、暫^{しばら}／＼は憂^{うれ}ふる如^{ごと}く、また／
尾^を、振^なりて喜^{よろこ}ぶ如^{ごと}く、／涙^{なみだ}をはら／＼流^{なが}し／けれ
ば、「この犬^{いぬ}実^{まこと}に／得^{とく}度^どせり。「子^こにも孫^{まご}／にも崇^たり
をせん」と言^いひし／女^{おんな}の恨^{うら}みも晴^はれ、末^{すま}／＼／障^{しやう}礙^{がい}
あるべからず。心^{こころ}／安^{やす}し」と打^{うち}ち喜^{よろこ}び、上^{うへ}／平^{たひら}か
なる石^{いし}を以^もて つきへ

〔十二ウ—十三オ〕

つき机^{つくき}に代^かへて座^ざを組^くんで、／法^ほ華^け経^{きやう}の五^ごの巻^{まき}
なる／提^た婆^ば品^{ほん}をぞ読^よ誦^{じゆ}ある。／そも／＼これは、八
歳^{やち}の龍^{りゆう}女^{にょ}／菩^ぼ提^{だい}の験^{しるし}を／顕^あはし、女^{おんな}人^{にん}によ／成^{じやう}仏^{ぶつ}示^めさ
れ／たる、いとも尊^{たふと}き／要^{よう}品^{ひん}えうなれば、身^みの為^{ため}／久^い
の為^{ため}にとて今^{いま}を／限^{かぎ}りの御^{おん}声^{こゑ}高^{たか}く、／その美^{うつく}しさ清^{きよ}
けさは／例^{たと}ふるにものなかるべし。／松^{まつ}の嵐^{あらし}は琴^{こと}を
調^{しら}べ／谷^{たに}の水^{みづ}は鼓^{つづみ}と響^{ひび}き、／聖^{しやう}衆^{じゆう}の来^{らい}迎^{かう}他^た所^{しよ}／なら
ず。はや御^{おん}経^{きやう}も／果^{おま}てに及^{およ}び、「一切^{いっせつ}衆^{じゆう}生^{せい}いづつさい／黙^{もく}
然^{ぜん}信^{しん}受^{じゆ}もくねん」と読^よみ切^きり／給^{たま}へば、八^{やつ}房^{ぶさう}は立^たち上^あがつ
て／婦^か志^し姫^{ひめ}を見^み返^{かへ}り／＼汀^{なみさ}を／指^さし、静^{しづ}／＼立^た
行^ゆくほどに、／对^かひの岸^{きし}より弦^{つる}音^{おと}／高^{たか}く、いと強^{した}か



図版4 十二ウ、十三オ

なる雁股の矢／一つ来てつて八房の喉を射通し、／余
 れる矢先婦志姫の右の乳の下／斜めに射削り、巖に
 当たり矢の根は片方に／飛び散つたり。八房も／はつ
 たと倒れ、姫も一声／「あ」と叫びて横様に」伏し転
 び給へり。この／時久しく川中に／立ち塞がりし雲／
 霧の、今射かけたる／矢の響きにつれて／忽ち晴れ
 ／渡り、二十歳／ばかりの一人の／若者、狩人／めい
 たる出立ちし、／柿の脚絆甲／掛して、菟織の／頭
 巾の紐を結び弛／めて後ろへ脱ぎかけ、弓を／携へ
 箆を背負ひ、対ひの／岸に現れたり。此は誰ぞ、／
 去年の秋、庵西へ／使ひして追つ手の者と／手痛く
 戦ひ、その後行方／知れざりし金毘大助／孝則なり。
 予て浅瀬も／知つたりけん、件の川へ下り／立つて
 一丈ち／余りの流れを／横切り、瞬／隙に馳せ／渡る
 に、水高股だに越え／ざりけり。此方の岸を／上ると
 斉しく、鉄の胴金／繁く纏へる山刀の鞘／ながら、
 打ち倒れたる八／房を力に任せて●●五六／十、打
 ち／終はつて／につこと／笑み、その／ま、姫の／御側
 へ／進み寄り／しが、「あなや」と叫び、思はず／尻居

にどうと座し、呆れ果てしが、●●／再び立ち寄り驚き騒ぎ、抱き起こし、傷口見れば、浅傷／なれども脈は上がり／身は冷えたり。腰の薬を取り出だし、水以て口に注ぎ入れ、呼び生くれ／どもしる／しも見えず。大助は拳を握り、我が手に身内を掻き、筆り、悔し涙は滝の如く、立つたり居たり身悶えし、「折角仇を仕留めし甲斐なく、姫」君救ひ参らせんと思ふ忠義は不ちゆ／うとなり、●●／千万無量の罪を得たり。幾度悔ゆとも返りはせじ。心ばかりの申訳、黄泉の御供仕／らん」と差添、抜き持ち、念仏と共に左手の脇腹、撫で下ろし、突き立てんとする折／こそあれ、弾丸／一つ飛び来て、右の腕にはつしと当たり、●●／思はず刀取り／落とし、辺りを見れば、後ろなる木立の内、に声ありて、『鼯鼠は木末求むとあしびきの山の狐男につきへ』

〔十三ウー十四オ〕

つぎ遭ひにけるかも。金毘大助／早まるな、暫く待てと呼びかけて、●●／郷實治部／大夫義真／朝臣、熊の皮の行膝に豹の毛の尻鞘の野太刀豊かに腰に佩き、唯之をたゞ一人後に従へ立ち出で給へば、『思ひがけなき我が君様、許させ給へ、面／目なし』とまたも刃を、取り上ぐるを、手に持つ弓にて／しつかと止め、『死罪を犯し山に入り、我が儘に切腹せんとは重々／の不屈き者め』と叱り懲らされ、大助は「はつ」とばかりに恐れ入り、刃を捨て、平伏しけり。義真は婦志姫を見て、打ち嘆き、側らに散つたる数珠と書置を九郎に取らせて読み終はり、『珍しや金毘／大助、何故あつて身を隠し、今、た犬と姫を殺す。仔細は如何に、詳しく語れ』と問ひ／給へども、返事もえせで猶身を縮め、頭も／え上げず。『大助君の御錠なるぞ。刃を収めて御返答、早く申せ』と唯之に言はれて、大助漸くに頭を上げて刀取り



図版5 十三ウ、十四オ

あ
 上げ、差／添諸共唯之に渡して少し引き退き、／『死
 に遅れして我が君に凶らずも見え奉る。／その嬉し
 さも去年今年、重ね／の落ち度にて／申解くべき
 言葉もなく、物語るほど我が罪を覆ふ／やうには候へ
 ど、たゞ一行申上げん。去年庵西に／欺かれ、大切
 なる御使ひえ果たさずして／身を逃れ、帰る道にて追
 つ手の敵と手痛く戦ひ、●●辛くして／帰れど城
 は十重／二十重攻め囲み／たる折なれば、／入ること
 叶はず。東／條もおなじ様にて、差し／当たり
 身／の置き／所／も／無き／次第。／「いで敵陣へ
 突き入つて、／斬死／せん」と／逸りしが、／自
 ら／心を落ち／着けて、それも／また無益／なり。
 弱からぬ／ども二つの／城、ともに／兵糧／乏しけれ
 ば、／我鎌倉へ」急ぎ着き、／管領家へ／推参し／
 事の由を／委曲に述べ、／嘆きて救ひを請ふといへ
 ども、／主君の書状を／持たざれば、人疑ひて／事
 調はず。此処にも／無益の日を費／やし、安房
 へす／こ／／帰来れば、／庵西かけ列／はや滅
 びて／一國君の／御手に／付きぬ。／「あらよろ／こ



図版6 十四ウ、十五オ

「ばし」と思ふ／にも、露／ほどの／手柄も無く、／
 時遅れて／をめぐ／と見参には／入り難く、さり
 ／とて今更（つきへ）

〔十四ウ—十五オ〕

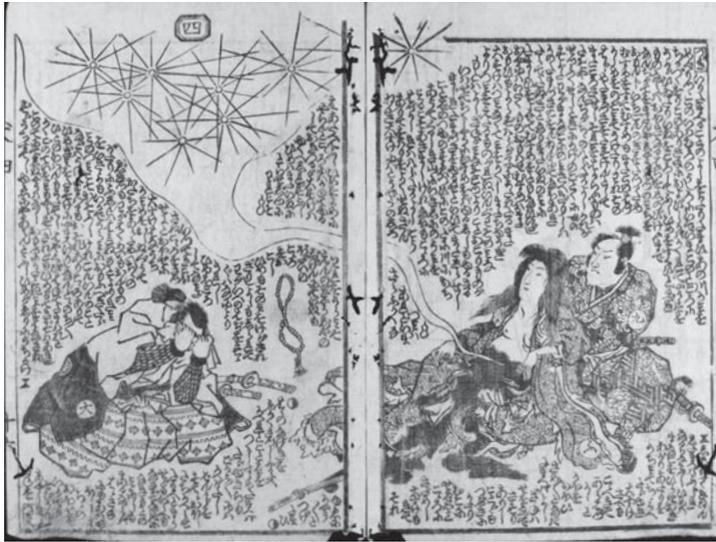
「つき」腹も／切られず、／「時節を／待たん」と故
 郷の上総の／天羽の関村に／縁訪ねて、百／姓の
 なにがし／身を寄せて、／去年と今年／と月日／を
 ●重ね、この頃人の噂にて／姫君のこと確かに聞、
 「これはいみじき君の／御恥。その犬怪しきものなり
 とて形だに／あるものならば、殺すに難きことかあ
 らん。密かに／富山に分け登り、犬を殺して姫君を／
 救ひ取り参らせなば、前の落ち度を贖ふ／一つにな
 りこそせめ」と人目を忍び當国こくへ／立ち帰り、富山
 に登りて御在処残る隈なく／尋ぬといへども、川より
 彼方は霧深く、水の／浅瀬も窺ひ難く、今日も川辺
 に立ち出で、／気は苛立てども力及はず、汀の松
 に腰／打ち掛け、見れども見えぬ谷川の彼方に当たり、
 「悲しげに経、読む女の優しき声。此は疑ひなき／姫君」

と嬉しきものから、「御有様見へぬは」口惜し。この時に頼むは神明仏陀の冥助」と「洲崎の明神、名護の観音、孝則が思義哀れと／思し、霧を払つてこの川を容易く渡らせさせ給へ」と、神を凝らして目を開けば、不思議や忽ち雲霧／晴れ、見渡す山に洞穴あり。女の姿は確かに／姫君。思ひしよりは瀬も浅し。「いで渡らん」と踏ん／込めば、片方／ありし犬めくもの此方を見つけて馳せ来る様、／「奴寄せ付けては悪しかりなん、先づ射て取らん」と携へし弓／執り直し、「先祖より伝へし矢の根はその昔、怪鳥を／仕留めて目出度き吉例、靈ある獣も／これにて射たらば仕損すまじ」と、予てより用意／せし矢を打ち／番ひ、忘る、／ばかり引き／絞り、／狙ひ／澄まして／切つて／放せば、／矢響き／諸共／彼の／犬は／喉を／射貫かれ／汀に伏す。／「してやつたり」と早川の●「水より／速く渡り／来て、見れば／無惨や姫／君も余り／の矢先に／この有様。／法度を／破りその上／に、主君を／殺す大罪／人。切腹／せんとせしは／粗忽。如何なる／刑罰受く／とても御／恨みには／存すまじ。／繩かけて賜べ、／森口氏」と我が手を後／ろへ押し回す。／九郎は聞く／／領くのみ、／主人の／気色を／窺へは、／義真／数多吐息を吐き、「思ひし／ことの食ひち／がひ、思はず／重ねし罪／なれど、刑／罰は許さ／れじ。されども／姫が死せしは／天命。彼／もし汝に／射られずは、／またこの川の／藻屑とならん。／その書置／読み聞かせよ」と仰せに／唯之声を／上げ、読めば／大助感／涙に噎びて、／姫の優れ／たる心様／を聞、知るにも、／いとゞ我が／身の粗／忽を／悔やみぬ。／義真は／大助に今日／この山に

○此処も／昔ありし／ことを義真／の物語りに／よりにて／描、す。

〔十五ウー十六オ〕

つぎ 入り給へる事の由を語り給ひ、「あの川上を／巡りつ、この岩室の後ろに出で、今この所に／近づく折、この有様に及びしかば、隠れて様子を／窺ひ居たり。犬を殺して婦志姫を救ひ取るべきものならば、大きな



図版7 十五ウ、十六オ

恥を忍び、今日まで／汝が手待たんや。賞罰の道を
 重んじ、一言の義を立つる為／娘を捨て、娘もま
 たこのはづ／かしめを望みて承けたり。我その／始め
 玉章を助けんとして／また殺させし、それを計らふ者
 は／誰そや、汝が父の八郎孝よし。彼が／切腹せし
 時に影の如くに女の／姿、我が眼にのみ遮りしは
 彼の玉章の怨念にて、猶飽き／足らで狸となり、
 また犬の身に／魂を寄せて娘を伴ひ出だし、／親
 には甚く物思はせ、娘はまた／思ひも寄らず八郎が
 子に討たれたる。また／大助は罪なくて身を隠し、ま
 た忠義／より罪を得たるも逃れぬ因果。そのみな／
 もとは義真が皆粗忽より事起こり、物が／言はせて畜
 生に娘をば許ししも、許さる／まじき玉章を、許せ
 と言ひてまた斬らせし／言葉の露の末遂に、この谷川
 に落ち／合うて、苦しき山に生死の海を／見るこそ浅
 ましけれ。猶も心に／恥づかしきは八郎孝よし、功
 ありて終はりをよくせぬ残／念さ。大助には東條の
 城を与へて婦志姫を嫁に／やらんと、心には予て
 許しておきつるが、大助は／行方知れず。婦志／姫

はまた犬に／取らせ、実に／我こそ／

四

●／罪は／あれど、今／更深くな／我を恨みそ。／役行者の／示現にて、犬も／菩提の／心／を起／こし、／
 姫もその身を汚され／ざりし由も知られて、／我が家の恥を雪／ぐは何より／嬉し。／姫を殺／して涙／一滴零
 ／さぬ心を察／せよ」と仰せに、／大助鼻打ち／搦み、目を押し拭うて／形を改め、『父の／自殺も我が薄命も、
 御物／語りに不審は晴れぬ。元來君／を些／かも如何で恨みに思ふべき。たゞ／身の罪こそ恐ろしけれ。婚姻のこ
 と／などは承／るも恐れあり。心ありて／姫君を助けに山へ入りしなんど、後／／人の言はんも転てし。
 はや首刎て賜はれ」と／覚悟の態を見もやらず、『されども姫が手傷は浅し。／この傷にて死ぬやうはなし。思
 ふに、片時身を離さぬ／数珠打ち捨てし故にやあらん』と婦志姫が襟に打ち掛け●●●暫く祈念／し給へば、不
 思議／なるかな婦志姫は／眼を開き起き／上がり、辺りを／打ち見て、『父上／唯之／大助／さへも／此処へ来て、
 ／あら恥づ／かし』と／顔を／覆ひ／さめ／と泣き／給へば、義／真は／背を撫で／擦り、／ありし／ことッ
 も／具さに／語り、／／婿に／せばやと／心に／定めし／大助も／来て、／それ／故に／斯様／／と／告げ
 ／給／ひ、●●●／母の嘆きを／深く察し、屋形へ／帰れ』と言葉を／尽くし勸め給へば、／唯之等も／御孝
 行には／代へ難し。／万事を／捨て、思し／立ち、帰らせ／給へ』と申／せども、答へも／なさず泣きに／泣き、
 『元の／身にしも／あるならば、／母様／にも会はず／ほし。／父の／仰せを／如何でか／背かん。／怪しき／胤
 を／つぎへ



図版8 十六ウ、十七オ

〔十六ウ―十七オ〕

つゞき 身に宿し、人交じらひがなるものか。況して金毘大助は、夫なんど、はのた／まふまじ。彼もし夫に定まりたらば、／八房に伴はれしは夫を／重ぬるいみしき不義。また八房を／夫とせば、大助は我が為に他所に／見られぬ仇なり。されば、／犬も大助も我が夫／には候はず。この身は一人／生まれ来て一人で帰る／死出の旅、止め給ふは情け／なし。子を生まずして死ぬ者は／血の池地獄に墮つといふ。それを／厭ふにあらねども、怪しく宿りし／犬の胤、正さで死ぬはいと口／惜し。惑ひを／解かん／その為／ぞ」と、懐／劍抜き持ち／腹へ突き／立て、真一／文字に／●／切り裂き／給へば「傷口より／一筋の／白き煙／現はれ出で、／彼の水／晶の数珠を包み空へ昇ると見えけるが、／数珠の緒切れて／一百いっはそのま、土へ／からりと落ち、残れる八ツの数／取りの珠は御空に飛び廻り、／光を放ちて／星の如し。折節／吹き来る／風につれ、／彼の珠／四方に／乱れ散り、／何処とも／なく●」●消え／失せて、／跡



図版9 十七ウ、十八オ

は／東の／山の端に／夕／月の／影差し／昇れり。
 ／深傷に屈／せず、飛び去る／光姫は／見遣りて、
 ／「喜ばしや、／神の結びし／腹帯も／疑ひも」皆
 解けたれば、／心に懸／る／雲、なし。／南無阿弥
 陀仏」と／手を合はせ、刃抜き／捨てはたと伏し、
 遂に／事切れ給ひけり。／女には似氣無きまで／逞
 しき御最期、／いと哀れは深、りけり。／各々
 涙を／止めかね、／大助も／姫君の／自裁に／心
 励まされ、／その血／刀を／拾ひ／取り、／再び
 腹に／突き／立てんと／するを／義真／叱りつけ、
 ／『またしても／つぎへ』

〔十七ウー十八オ〕

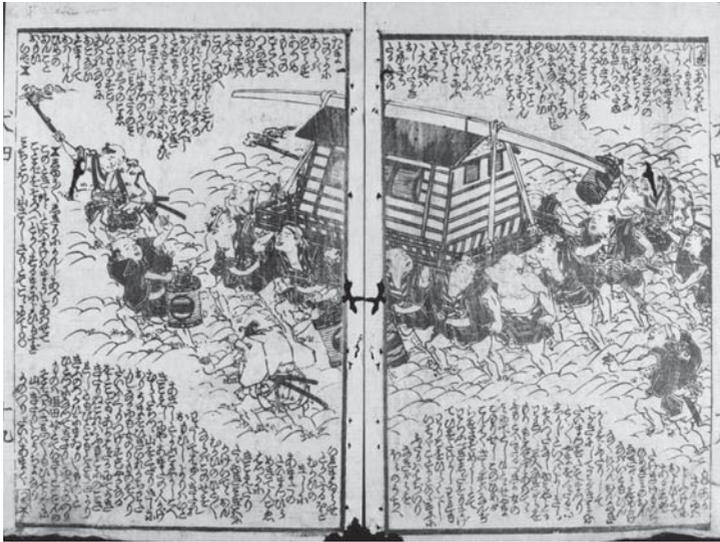
〔つぎ〕 我が身勝手。／さほど命の捨て／たくば、
 此処にて成敗／して取らせん。観念／せよ」と義真
 は／大助が後ろへ／回り、太刀抜き／持つて居／給へ
 ば、／冥加に／余る君の／御手討ち。はや／遊はせ」
 と襟／差し伸べ、差し／俯きて覚／悟の態。刃／振
 り上げ／大助が／髻／すつぱり／切り捨て／給ひ、

/ 『大助が』刑罰相／済んだり。我／もし民と／諸共に●今日この山に／登りなば、大助に／罪無かるへし。／
 首に／代へたる／髻は、／これ八郎／への我が／寸志。／父なり／子なり、／死するに／臨み、／その罪に／
 陥つても／主人も／救ふに／由無きこと。／如何にともせん／術無し。嗚呼／大輔だけは大国／を輔たくる臣しと
 なれ／かしと名付けし／のみか、我もまた／治部の大輔の／官に進み、／読みこそ違へ共に／大輔たい、我が身に
 か、らん／その役を代はりてその／身に承けたりけん。可惜／若者埋もれ木と為す／残念さは、目前の姫の／別
 に勝りて口惜し。たゞこれ／よりは親の為、娘が為にほと／けに仕へ、名僧知識となれかし」と／声曇らして宣
 へば、大助も噎せ返り／地に平伏して有難涙。／唯之も鼻打ち擗み、「今に始／めぬ君の仁心。和殿、身には／一
 郡一城いちぢやん、千万貫せんまんの禄にも／勝り、満足ならん」と諫められ、／大助漸く涙を飲み込み、／『畜生さへも
 得度／せり。愚かに拙き／某も今より／諸国を經巡り／て、難行苦／行に身を／責め懲らし、姫／君の後世を
 / 弔ひ、御家の／武運を祈る／べし。よろづ／犬より事／起ければ、犬といふ字をニツに／分け、大助の／大
 をそのまゝ、大だいゆと／名乗り候べし。』

つきへ

〔十八ウー十九オ〕

『つき』天晴れ、／美しくも申し／たり。回／国修行／のその序で、／姫が自殺の／傷口より／白氣はく棚／引き、
 八ツの珠／飛び去つて／八方に／分かれて跡無く／消え失せしは、／畢竟その／故なくばあらし。／後／思ひ
 / 合はすること／必ずあらん、／心を留めよ。／残りの／数珠は門／出の餞別。／大事に／掛けよ、入／道と
 / 賜へば、／大だいゆは／押し頂き、／「飛び去つ／たる八ツの」珠、／此の世に／在らば／残らず／集め、／元の
 / 如くに／繫ぎ／合はせん。／さらずは／再び／この国へ／足は向けじと存／ずれば、これ今生の／御別れに
 候ふべし』／とぞ申しける。この時／夜もはや初夜に及び、／月澄み渡り昼の／如し。山松の影／岩越す水、猿



図版 10 十八ウ、十九オ

のみ／叫び、鹿の声／いと物凄く／哀れなるに、
 行ひ／澄まして／おはしけん／姫の御事／思ひ
 出で、●主従頻りに感じ合へり。／この時九郎と
 大助は、申し合はせて／言葉を揃へ、『兎角する間に
 宵も過ぎ、道遠く山嶮し。さりとて此処にて●』
 明か／さんには、夜更けに／及び毒／ある蛇、猛
 き獸等／姫君の御亡骸を目がけ／なば、いとも便
 なく候はん。御亡骸を二人して／手兒きにして我
 が君に／松明を奉り、疾く／山を下るに／及
 かじ』と言へば義真、／「其は拙し。弓矢執る／我
 々三人、亡骸を／守もえせず慌て、麓へ下るべ
 きか。女の身にて年一年、山籠りせしこの姫が／
 魂魄去らずは、汝等／等をさぞ女々しとて／笑ふべき。
 齒朶折り曲げ／て火を焚けかし。我も／破子を開くべ
 し。／急ぐことか』と宣ふに、／二人は恥ぢ入り／
 亡骸を／洞の中へ／入れ参らせ、／兎角するほど／対
 ひの／岸に／数多の／松明ひら／めきて、人声／僅か
 に／聞こえたり。／唯之汀に／駆け出で、／御迎
 ひの人々／ならば、この瀬を／渡して早く来れ。



図版 11 十九ウ、二十オ

思ひしよりはいと／浅し」と呼ぶ声彼処へ／聞こえ
 しにや、数多の人影／群立ちつ、山を下り岸に／降
 り、馬を引き入れ打ち渡りし。中にも女乗物を釣り
 台に括り付け、健やかなる／男共赤裸にて昇き
 来りぬ。これは麓に残さ／れし供人共と、滝田より
 急の使ひに参りし者と／一つになつて来りしにて、
 彼の乗／物は垣田たかとい五十子御前の／側仕へ、前
 へも密かやに／山へ来りし老女なり。／彼の釣り
 台は、雨具つぎへ

〔十九ウ—二十オ〕

つぎき 松明乗せ来りしものなるべし。火／急の使
 ひ気遣はし／と唯之駕籠の戸を開／けば、垣田は中
 より転び出で、／白絹にて腹帯締め／同じく後ろ鉢巻
 し、／心雄々しき女ながら／道を揺られし早／駕籠
 に今更眼／眩きて、絶え入らんと／して人／々に
 呼び励／まされ、御前に出で、／御館を出でさせ
 給ひて後、奥様の／御病き益／重らせ給ひつ
 へ、我が／君は何処におはする。／如何に／と

囃言／にも言ひ止み給はず。／御曹司義業君／にも拵へ侘び、／「実は富山へ行かせられ、／斯様〜」と申さ
 せ給へば、／「富山は魔の棲む山と聞く。／もしも彼処へおはしませば、／事無く帰り給ふまじ。追ひ／駆け追ひ着
 き、呼び返し申せ〜」と御憤り、御曹司も詮方尽き、／妾を今日の御使ひに」と語る」折しも対ひの岸、ま
 たも数多の／火の光、女乗物さへ見ゆるに、心／ならざる再度の早打ち、「はや疾く〜」と声〜にまた
 彼の釣り台持て行きて、初めの／如く渡したり。此度は年も若やかなる／香折かといへる腰元が、同じ／出立ちに
 身を固め、駕籠下ろさ／せて出づると齊しく、息切れ／倒れて正体なし。顔に／清水を注ぎかけ劣る／ほどに
 蘇りぬ。義真／声かけ、「五十子は如何に／しつる」と問ひ給へば、／先づ先立つは／涙にて、／「奥様は／今朝
 巳の／刻に」と言ひ差し、／「わつ」と泣き／伏せば、『事切れ／たるか』さん候。／申上げん言葉も／無し。
 ／垣田が●一屋形を出づると問もなく、敢へ／なくならせ／給ひて候。／「忍びの●御出でに憚り／あれ
 ば、早馬も／立てられず。其方も／密かに折／／は彼の／山へ／行きし」由、／幸ひの／早使ひ」と御
 曹司の／仰せを受け／と語れば、／義真／その余の／者共、／齊しく／嘆き／悲しみ／けり。『五十子』が今際
 の／願ひ空／しきに似て、／姫の始末／言ひ聞か／せんも便／無ければ、／末期に／会はぬも／互ひの／幸ひ。
 ／あれを見よ」と二人の女に／姫の亡骸／指し示し、／「今は我等は山を／下らん。二人の女は

〔二十ウ〕

つぎき 此処に留まり、大助も姫が為仏を／念じて伽をせよ」と、それより人々／引き連れて／馬にて川も易く
 越し、遂に滝田へ帰りた／まひぬ。○義真の仰せを受け、大助は／婦志姫を懇ろに葬りて／墓所とす。
 されども標の石を建てず、／松が枝並んで塚印となれり。／人呼んで義烈節婦せつもの墓と／いへり。また八房も
 土葬に／せり。洞を去ること三丈／余り、戌亥の方に年／経りし檜の木元にぞ／埋みける。此はやがて／犬塚



図版 12 二十ウ、原裏表紙見返し

と呼べり。大助は頭を剃り、四十九日のその間、山に籠りて、婦志姫の形見の法華經を誦誦しつ。滝田には内君の御葬式執りおこなはれ、米穀数多施行あり。また洲崎の岩室へは忌み明きて後、物数多参らせられて利益を謝し、猶行く末を祈り給ひぬ。四十九日は菩提寺にて大法会ありしかば、大をも召し寄せんと富山へ人を遣はすに、昨日までは御墓の片方を去らず侍りしが、何処行きけん、彼方此方を遍く探させ給へども、行き方更に知りざりけり。次の年婦志姫の一周忌には富山において

●観音堂建立ありて、姫八房のことを記し、書置諸共、厨子に込め、今猶その堂に彼処に在りとぞ。これより後は彼の八ツの珠の行方を詳しく述べべし。其は五編より数々に記し、初めて、編を継ぎ、巻を重ねて大尾に至らん。先づこの本は目出度し。

笠亭仙果鈔録
歌川豊国画圖



図版 13 四編下原裏表紙 (一色刷)、四編袋 (色刷)

〔原裏表紙見返し〕

嘉／永／八／乙／卯／春／新／鐫／目／録

おほみそ かあけぼのさうし 廿二編／廿二編 京山作／芳綱画

大晦日曙草紙 わつべうためうくぐるま 初編／二編／三編 種員作／國貞画

童謡妙々車 はついでんいぬ 卅三編／ヨリ／卅八編／マデ 仙果録／豊

國画／國貞画

まつらぶねみ さほのまこと 松浦船水棹婦言 四／五 仙果録／國芳画

おとしだまび しやうねんし 御贄美少年始 十一編／十二編 同録／國綱画

やゑなでしこかさねものがたり 八重撫子累物語 三／四 同録／國貞画

けうかくでんおちなえとよ 俠客傳仙摸略説 十二編／十三編 西馬譯／同画

はなのみがさうめわかものがたり 花蓑笠梅雅物語 四／五 西馬譯／國輝画

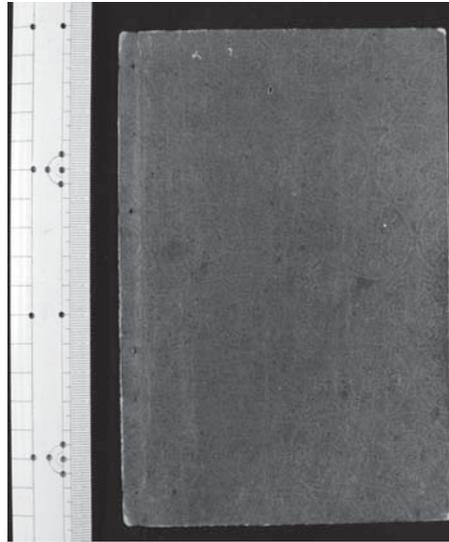
しまのりなまのあまのひな 嶋巡浪間朝日奈 七編／八編 種員譯／同画

たひすめあいやはなし 旅雀我好話 初／二／三 種清綴／國貞画／種員閱

しや ぶなまこころんさうし あはせ 鹽屋／文正古今草紙合 十二編／十三編 仙果作／國輝画

東都南傳馬町一丁目／地本草紙問屋葛屋吉蔵板

〔原裏表紙〕



図版 14 三編四編改装裏表紙（縹色）

登場人物一覧（四編下）

次に『雪梅芳譚 犬の草紙』四編下の登場人物名を掲げ（読み仮名・漢字とも表記は原文のまま）、その下の【】に、相当する『南総里見八犬伝』の登場人物（その他）の名を示す。

郷實治部大夫義真【里見治部大輔義實】

郷實末元【里見治部少輔源季基】の子。安房四郡の主。役行者の導きにより、八房と共に富山【富山】に

入った娘の婦志姫を追って隠れ家に至り、その最期に立ち会う。（四編下の本文には、「大輔たいふい」とある。）

〔袋〕

己酉新刊

笠亭／仙果鈔録

一陽齋／豊國画圖

仙果戲筆

紅英堂／上梓

雪梅／芳譚 犬の草紙四編

（読み仮名は原文のまま）

もりぐち
森口九郎唯之【堀内藏人貞行】

郷實義真の家臣。義真とともに富山に登り、婦志姫の最期を見届ける。

かなまり
金毬八郎孝利【金碗八郎孝吉】

神輿光寛【神餘長狭介光弘】の忠臣。金毬大助の父。玉章【玉梓】に溺れる神輿に意見して改易され、浪人となつ

ていたが、亡き主君の仇討ちのため義真に協力し、山緞濁左衛門貞金【山下柵左衛門定包】を討つ。義真に長狭半郡と東條の城を賜わりますが、故主神輿への忠誠を誓い切腹する。会話にのみ登場。（四編下の本文では「孝よし」になつている。）

かなまりだいにすけたかのり
金毬大助孝則【金碗大輔孝徳】

金毬八郎の子。貸した米の催促の使者として、安房太刀山【館山】の城主庵西三郎かげ列【安西三郎大夫景連】の屋形に行ったまま行方不明となつていたが、一年後、婦志姫と八房のことを伝え聞いて富山に入る。姫と八房を捜し当てるものの、八房に向けて放つた矢で婦志姫にも傷を負わせてしまう。婦志姫の死後出家して、大【、大】法師と名乗り、姫が首に掛けていた数珠から四方に飛び散つた八つの珠を探し求める、という役目を義真から任される。（四編下の本文には、「大輔すけ」とある。）

いしごぜん
五十子御前【五十子】

郷實義真の内室。婦志姫、義業の母。富山に隠れ住んだ婦志姫の安否を気遣いながら、会えぬまま病死する。

婦志姫【伏姫】

郷實義真の娘。義真の戯言を虚言にせぬため、八房に伴われて富山に隠れ住んでいたが、一年後、山中で遭遇した童に、数月来の不調が八房の気を感じての懐妊であったことを知らされる。窟に帰って自分を探しに来た父と再会し、その懐妊を恥じて割腹するが、首に掛けていた数珠の内の八つの珠が、四方へ飛び散って行ったのを見届けて事切れる。

郷實二郎太郎義業【里見治部少輔義成】

郷實義真の子。婦志姫の弟。会話にのみ登場。

八房【八房】

郷實義真の飼犬。婦志姫を背に乗せて富山へ赴き、一年間同じ窟で婦志姫の読経を聞いて暮らしていたが、大助の矢に射られ絶命する。

垣田【柏田】

五十子御前付きの老女。五十子御前の命により義真の跡を追って婦志姫のいた窟に来る。

香折【梭織】

五十子御前の腰元。五十子御前の死を義真に報せるため、垣田に続いて富山に来た。